

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

BEL CICLISMO!

## \* 素晴らしき自転車レース⑧ \*

谷口 和久

### ● 言い訳の多いプロローグ

当初は2, 3回で力尽きる予定だったこの連載も、(なぜかわからぬが)初回から1年が経ち、はや8回目を数えることとなった。イタリア関連の方からは「自転車のことって、よくわからんし、興味もなし・・・」、自転車好きの方からは「イタリアのことやイタリア語が目ざわり・・・」といった類の苦情をいつ受けてもおかしくない内容だと思われるのだが、幸か不幸か、筆者の耳に都合の悪い声はいっさい入ってこないの、これからも調子に乗ってこのまま筆を進めていきたい。

とはいえ、調子に乗れるほどの知識も経験もなく、見識ある方が一読すれば、“苦しまぎれに”原稿のマス目をうめていることはアリアリであろう。

今回もそんな類の話であるが、この機会に、これまでの連載ではあえて触れてこなかった自身の自転車のルーツ(?)をカミング・アウトしたいと思う。

それは何かというと「はじめは、イタリアの自転車やレースにはほとんど興味がなかった」ということ。さらにつつこんで言うと、「自転車と言えばフランス、レースと言えばツール・ド・フランス」という人間であったのである、自転車を始めてから当分の間は。

今でこそ、ツールやジロといった多くの自転車レースを、テレビでリアルタイムで観戦することができるが、私が自転車に興味を持ち始めた90年代半ばには、ツールのダイジェスト版の放映が、実際の開催期間からひと月ほど遅れて、しかも夜

中の12時、1時といった時間帯に放映されるのみであった。当時、海外の自転車レースで日本に情報がそこそこ入ってくるものと言えば、ツール・ド・フランスだけだったのである。そういったこともあり、筆者にとっては「ツール1番、ジロ2番」、「ジロ = イタリアのローカル・レース」、「フランスこそ自転車大国」であった。



【筆者が観戦した'02ツール・ド・フランスの一コマ】

事実、ツール・ド・フランスは「世界三大スポーツ大会」のひとつなのである。ちなみに、残りのふたつはオリンピックとサッカー・ワールドカップなので、他のふたつに比べると知名度(特に日本での)は格段に落ちるのだが。

### ●隠れフランス好き？

2001年、人生初の欧州旅行の行き先は、当然のごとくフランス。パリでレンタ・サイクル(型はママチャリに毛のはえた程度)を借りて、ツールの最終ステージよろしくシャンゼリゼ大通りを走り回りパトカーにクラクション鳴らされたのも、今となっては(いろいろな意味で)冷や汗ものの思い出だ。

この時のパリ訪問では、凱旋門をはさんでシャンゼリゼの先にあるグラン・ダルメ通りというエリアに自転車屋が並んでいる、という情報を手に入れて行ってみた。しかしながら実際に行ってみたところ、ほとんどの店はすでに看板を下ろしており、唯一営業していた店も当たり前のようにフランス製品しか並べておらず、「さすがフランス」と妙なところで感心したものだ。

翌2002年には、ツール・ド・フランスの観戦&参戦(もちろんアマチュア版)という、自転車乗りにとってはなんとも夢のようなツアーに参加。ちなみに、アマチュア版の大会というのは「エタップ・デュ・ツール “Etape du Tour”」とよばれ、ツール開催期間に設定されたプロたちの休息日に、アマチュア自転車愛好家のために、本番のツールとまったく同じコースを開放して走ることのできるイベントであり、参加人数は8000人を超える大規模なものであった。言うなれば「自転車版ホノルル・マラソン」。これを走った後もしばらく現地に滞在し、本物のレースをアルプスの山岳地帯でじかに観戦した。地元フランスはもちろん、ドイツ、スペイン、ベルギーといった周辺の国々からバカンスを利用してやってきた観客が、沿道を二重三重に埋めるさまは圧巻であった。夏のバカンス・シーズンに開催すること自体、5月開催のジロに比べると、(集客といった観点でも)大きなアドバンテージであろう。

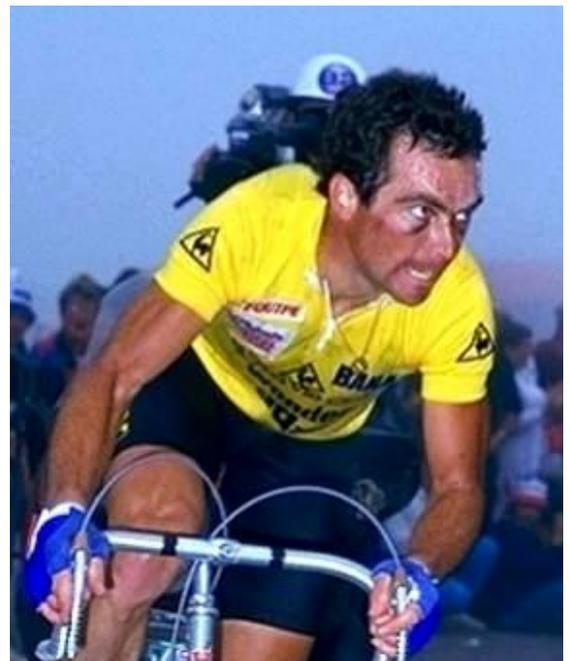
### ●イタリア vs. フランス

ツールは1903年、ジロは1909年に開幕し、いずれも一世紀以上の歴史を誇る。新聞社によ

る拡販キャンペーンの一環として始まった両レースは、間に2回の世界大戦をはさんで、今年2011年にそれぞれ97回目と94回目を迎える。あと数年で両者とも100回の記念大会となるわけだ。

歴史の長さはほぼ変わりがないものの、ツールの方が当初から国際色が強いというか、広く門戸を開いていた。逆に言えば、ジロは先に述べた通り、イタリアのローカル・レースといったおもむきが強く、参加選手も圧倒的に地元イタリア人が多数を占めていた。(別にジロが意図的に門戸を狭めていたわけではないが…)

たとえば、ツールでは、早くも第7回(1909年)の大会でフランス以外の選手(この時はルクセンブルグ)が優勝しているが、ジロで初めて外国人優勝者が出るのはツールに遅れること40年あまり、1950年の第33回大会である。国別の歴代優勝者の数も、ツールでは上から順に、①フランス:36、②ベルギー:18、③スペイン:13、④アメリカ:10、⑤イタリア:9であるが、ジロでは、①イタリア:66、②ベルギー:7、③フランス:6、④スイス・スペイン・ロシア:各3といった按配で、こちらは圧倒的に地元優位である。

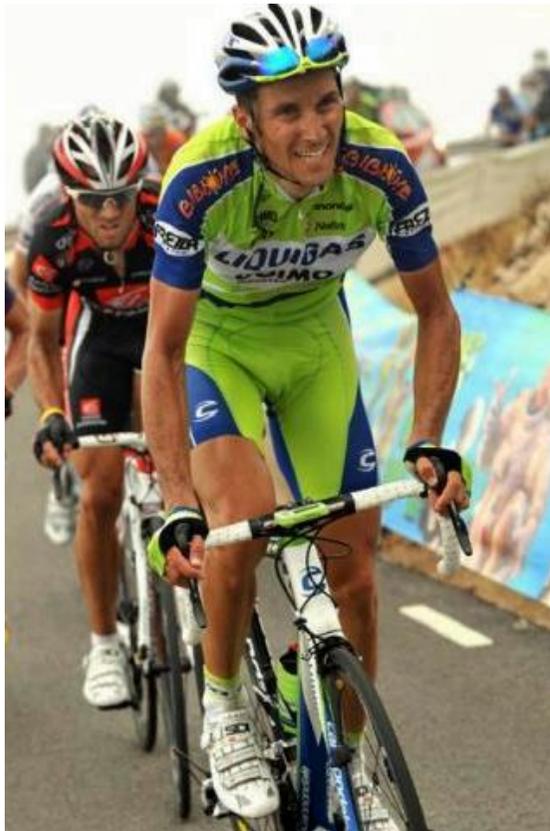


【“ブルターニュの穴熊” ベルナル・イノー】

また、ツールにおける地元フランス人選手の優勝は、1985年のベルナル・イノー以来とだえており、これ以降はスペインやアメリカなど、様々な国の選手がフランスを蹂躪しまくっている。一方、

ジロは近いところでも2010年にイヴァン・バツソ（バツソ “Basso =背が低い”という意味の姓ながら背は高い。名は体を表さず！）というイタリア人選手が優勝を飾っており、やはり「ジロの主演はイタリア人」といった様相を呈している。

ただし、これはあくまで主観だが、選手の国籍に関しては、イタリアがどうこうというより、フランスの地盤沈下の感が否めない。山岳や平地で、それなりに見せ場を作る選手はいるのだが、最終的な勝利への執念というか、かつて“ブルターニュの穴熊”と呼ばれ、全選手から畏れられたイノーが持っていたようなギラついた目は、今のフランス人選手たちにはもはや見られない。



【長身のイヴァン・バツソ】

話を改めて、機材に目を向けると、イタリア・フランスそれぞれ興味深い展開を見せている。

自転車本体(フレーム)に関して言うと、イタリアは本誌239号・241号でもご紹介したように、多くの工房が群雄割拠状態にあり、現在ビッグブランドといえるコルナゴやデローザも、元をたどれば小さな工房として旗揚げしていったものである。そういった職人のおりなすカラーがイタリアの独自性と言えるだろう。

一方のフランスであるが、かつては同じように技術力の高い小工房が存在し、中でもアレックス・サンジェヤルネ・エルスといったビルダーは、芸術品と言えるような美しいフレームを製作していた。ただ、「製作していた」と過去形で書いたように、これらのビルダーもすでに衰退・廃業し、今では一部の好事家が“愛玩”する自転車となってしまう。フランスの場合、むしろ近年はカーボンなどの最新素材を他社に先駆けて導入して、「ビルダー」というよりむしろ「メーカー」と呼ぶ方が似つかわしい、ルック“LOOK” やタイム“TIME”といったブランドが中心となっている。

偶然かどうかはわからないが、イタリアのブランドの多くが創業者の名前 —コルナゴ、デローザ、ズッロなど— を冠しているのに対し、フランスの主なブランドは先にあげたルックもタイムも英語、それもえらく単純なものばかりだ。フランス語至上主義のフランス人はいずこに？！

そんなところにも、彼我のスタンスの違いなどもあるのではなかろうか。「具体的にどんな違い？」と聞かれると困るけど。しいていえば、イタリアの自転車は創業者の個性や独自の考え方が強烈に反映されているのに対し、フランスは一般の企業と同様、先進の技術を取り込んで、その経営においても「マネジメント」や「マーケティング」「技術革新」といった、ビジネス街の書店でサラリーマンが進んで手に取りそうな本と同じ臭いがする。ま、独断ではありますが…。

そんなわけで、「ツール・ド・フランスが世界最大の自転車レース」という認識には今も変わりがないものの、知れば知るほど「イタリアのロードレースの方が面白い…」、それに「イタリアの自転車の方が魅力的…」というのが極私的結論である。なんとも牽強付会・我田引水(?)であります…。

#### [参考資料]

デイヴィッド・ウォルシュ『ツール・ド・フランス物語』,未知谷,1997

安家達也『ジロ・ディ・イタリア 峠と歴史』,未知谷,2009

仲沢隆『ロードバイク進化論』,樞出版社,2010

(当館スタッフ)

## RiITALIA -イタリア再発見-

### 第2回 『gentile と simpatico』

国司 航佑

外国語を習い始めるときの第一歩は、たいてい単語の暗記である。“I”は「私」、「be」は「は」、「Japanese」は「日本人」。“be”を主語の“I”に合わせて活用すると“am”になるから、“I am Japanese”で「私は日本人」だ。しかし、勉強を進めていくと、これではうまくいかないことに気付く。ちよつと待てよ、“Japanese”って「日本語」って意味もあるじゃないか。いやいや、「日本人」や「日本語」っていう名詞的意味の他にも、「日本的」や「日本の」っていう形容詞的な意味もあるのか。このようにして、新しく覚えた意味を付け加えながら、一つの単語の総体をぼんやりイメージできるようになっていく。

これとは違った覚え方もある。日本語を介さなくて、体験と結び付けながらそのまま覚えていく、という方法である。その言語が話されている土地に生活しているときなどは、しばしばこのようにして単語を習得するものだ。例えば、あそこの店の“sfogliatella”は最高だよと、友達に教えてもらったとする。“sfogliatella”がどんなものか分からなくても、その店に行って sfogliatella を食べてしまえば、ああこれが sfogliatella なのかと独り言ちて、この単語を覚えてしまうのである。

もうひとつ例を挙げよう。友達と会話していると、“cioè”という単語をよく耳にする。仮に、その意味は分からないのだけれども、辞書を引かないで、放っておくでしょう。それでも、“cioè”という単語が使われるのを頻りに耳にしていれば、その様々な意味を次第に理解していくことになるだろう。単語を言い換える時に使うのだな、いや、文章を言い換える時にも使えるのか、相手の言っていることが複雑すぎて分からない場合に、それを問いたですたためにも使えるのか、会話のリズムを刻むために使用されることもあるのか、等々。これが、単語をそのまま覚えるということである。



【ああ、これが sfogliatella なのか】

筆者は、高校生の時分レントという町に一年間住んでいた。この時、“gentile”と“simpatico”という二つの単語を、そのまま覚えた。伊和辞典で調べてみると、これらの単語の第一義は、前者は「親切な」、後者は「感じの良い」となっている。しかし、当時筆者の中ではそういった区別はなかった。simpatico であって親切じゃない人も、gentile であって感じが良くない人も存在しなかったから、大抵 simpatico な人は gentile でもあり、gentile な人は同時に simpatico であつた。要するに、この二つの単語は類義語として私の頭の中にインプットされていたのである。もちろん、用法の違いは把握していた。手紙の冒頭で、相手の名前の前に添える“gentile”を、“simpatico”で代用することはできない。感謝の意を伝えたい時に、“Sei stato gentile.”とは言いが、“Sei stato simpatico.”と言うことはない(できない)。このようなことは理解していた。しかし、同じ文脈にあてはめたとき、例えば“Bruno è ...”から始まる一文の述語として使う場合、“gentile”も“simpatico”も大して変りはない、そう考えていたのである。

その後、筆者は、イタリアの文学、歴史そして哲学を学んだ。こういう分野の学問を専攻すると、言葉の意味を歴史的に解釈する癖がついてしまうものだ。イタリア語の“gentile”という形容詞は、ラテン語の“gentilis”(同じ家系に属する→正当な家柄に属する)を語源に持つ。それから、イタリア語が誕生して間もない頃に、清新体派と呼ばれた当時の詩人たちが自分たちの詩作のキーワードに指定して、「優雅な」とか「崇高な」だとか様々な意味をそこに付け加えた云々。一方、“simpatico”については、その名詞形“simpatia”がその起源を

古代ギリシャ語にまで遡ることができる(＜syn 一緒に＞＋＜pathos 感情＞＝＜sympátheia 共感＞)云々。こうして、私はこの二つの単語が持つ歴史的重みを学んだ。

一般的な学者(?)の場合、ここでストップしてしまふだろうが、筆者は違う。イタリア人が日常的な会話をしているときに、そんな歴史の重みを考慮に入れて喋っているはずがない。私の友人の多くは、語源とか、言語の歴史とか、そんなもの全く知らないでも立派に(!?)イタリア語を話している。昔、「清新体派を勉強しているんだ」とある友人に言ったところ、「それって、文学の話だけ? えーと、二十世紀のことだったっけ」と答えられたのを覚えている。学術書を読むとか、インテリ連中の討論会に参加するとか、そういう時を除けば、「歴史の重み」なんかより普段人々がどういう意味で使っているかの方がよっぽど重要だ、と少なくとも私は考えている。



【筆者からすれば、この人こそイル・シンパーティコ】

という訳で、昨年の秋にナポリに住み始めた頃も、“simpatico”と“gentile”とは、ほとんど類義語として私の頭の中にインプットされたままであった。ところが、ナポリでの生活に慣れてきた頃だろうか、この二つの単語の意味が私の中で乖離始めた。ナポリの人間は、“simpatico”を「優しい」とか「感じの良い」とかいう意味を超えて、「いい奴」だとか、「素晴らしい人」といった、絶対的な肯定

を表す形容詞として使っている。一方の“gentile”は、「少しお堅い」といったネガティブな意味合いを伴うことがしばしばあるようだ。こういうことに気付くようになって、この二つの単語の輪郭が今までになくぼけ始めたのであった。

ところで、筆者がナポリに住み始めてから、今月で五ヶ月が経つ。この間、ナポリを離れることは少なくなかった。訪れた地は、ローマ、フィレンツェ、トレント、パリ等である。そして、今になって気付いたのは、ローマ人がナポリ人の性格について話すとき、イタリア北部の人間が南部の人間の性格について話すとき、フランス人がイタリア人の性格について話すとき、皆一様にこの“simpatico”を使っていた(フランス人の場合は、sympathique もしくは sympa)という奇妙な事実である。ここへきて、“simpatico”の意味は、もはや説明不能になってしまった。そして、不思議なことに、私が日常会話でこの単語を使うとき、無意識にネガティブな意味合いをそこに込めてしまっているようである。“I napoletani? Sono simpatici ma non sono gentili ....”

さて、ちっぽけながら筆者を絶えず悩ませるこの難題は、実は筆者だけのものではない。筆者が愛してやまない映画監督にパオロ・ヴィルツィという人がいるのだが、彼の代表作の一つ“Ovosodo”(リヴォルノの一地区の名。かたゆで卵“uovo sodo”の、なまった言い方に由来する)の中のワンシーンに次のようなものがある。

主人公 “L'essere umano più simpatico che conosco. Dovrebbe essere l'orgoglio della nostra città. Una così non c'è nemmeno a New York.” 彼女は、僕の知っている限り、人類で最も simpatico な人だよ。この町の誇りと言っていいと思う。こんな人、ニューヨークにだっていないさ。

友人 “A me le persone simpatiche mi stanno antipatiche.” 俺にとっては、simpatico な人間なんて、antipatico だね。

主人公 “...Ah, ho capito, nel senso che la simpatia è un falso merito, un merito mafioso, tipicamente italiano. In Francia o in Inghilterra, non ci tengono mica così tanto a restare simpatici ma avere i meriti altri. È questo che intendi dire, no? E infatti è sbagliato dire che

Giovanna è simpatica. L'ho rimpicciolata. È molto di più. Solo gli stronzi sono simpatici, giusto?" …あ、分かった。つまり、simpatia なんて、偽物の価値だってことだよ。マフィア的、つまりイタリア特有の価値だってね。フランスとか、イングランドなんかでは、simpatico であることはそこまで重要視されていない。彼らはもっと違う価値を大事にする。そういうことだよ？ Giavanna が simpatica だなんて、確かに、間違ってた。これじゃ、彼女を矮小化しちゃうよね。彼女は、もっともっと素晴らしいんだ。本当に simpatico な奴なんて、stronzi(クソ野郎)だけだ、そうだよ？

これは、主人公が、敬愛する先生(Giovanna)を親友に紹介しようとする一幕である。このとき、主人公は先生を simpatica と形容して賞賛しようとするのだが、親友はこの形容詞に敏感に反応して反論する。すると、主人公もまたこの形容詞の意味に立ち戻って、前言を撤回するに至る。映画全体の筋に照らせば実に何気ないシーンなのだが、“simpatico”という単語の多面性に悩まされていた筆者にとっては、心に響く名シーンである。筆者の拙い説明に戸惑っていた読者諸氏にも、このシ

ーンを読んでなるほどと納得してもらえた…なんてことはよもやあるまい。



【映画“Ovosodo”の一幕】

“gentile”と“simpatico”にまつわる件の疑問は結局のところいまだに解消されていないのだが、これらの二語が文脈によって大きく意味を変える、厄介だが中々魅力的な言葉であるということを確認したところで、今回は筆を置くことにしよう。

(元会館スタッフ)

## … 会館 だ よ り …

### イタリア語 無料体験レッスン

7月より開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア京都会館

7/1 (金) 11:00~12:30

7/2 (土) 11:00~12:30

7/2 (土) 13:00~14:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

7/7 (木) 19:00~20:30

● 梅田：大阪駅前第4ビル

7/1 (金) 19:00~20:30

7/3 (日) 13:00~14:30

7/4 (月) 19:00~20:30

### カンツォーネ講習会

今年の講習会では、サンレモ音楽祭でも歌われたなつかしの名曲「雨」をはじめ、日本でもおなじみの「フニクリ・フニクラ」などを歌います。みんな楽しく歌うことが目的なので、お気軽にご参加ください。初心者の方も大歓迎です。

・日時：6月17日(金) 14:00~16:00

6月24日(金) 14:00~16:00

・会場：日本イタリア京都会館 本校

・費用：

2回分一括 維持会員 4,000円

受講生・一般 5,000円

各回 維持会員 2,500円

受講生・一般 3,000円

・定員：30名 先着順



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>